

鑑賞・創造・人材育成

地域のハブ機能を担うことを意識し

鑑賞・創造・人材育成の3本を柱に事業を展開

島根インクルーシブシアター・プロジェクト（ダイバーシティいわみ）

公益財団法人しまね文化振興財団

山崎晋志 公益財団法人しまね文化振興財団 島根県民会館 文化事業課 課長

福間 一 公益財団法人しまね文化振興財団 いわみ芸術劇場 文化事業課 課長代理

門脇 永 公益財団法人しまね文化振興財団 島根県民会館 文化事業課 主任

島根県民会館では平成22年の全国ろうあ大会実施を前に、障害者を対象とした館内モニターツアーを実施。そこからインクルーシブな事業に意識的に取り組み始め、令和元年からは「島根インクルーシブシアター・プロジェクト」の名称で、施設の方針を明確に打ち出した。地域の関係者と連携しながら、鑑賞事業、創造事業に加え、事業を支える人材の育成事業にも取り組んでいる。令和3年からは島根県芸術文化センター グラントワでも同プロジェクトを開始し、高齢化の加速する地域における劇場の機能を模索しながら、地域の関係者をつなげる取り組みや、アウトリーチの実践などに取り組んでいる。

●事業の目的

・ 障害の有無に関わらず、あらゆる人が文化芸術を楽しみ、参加できることを目指し、鑑賞支援、創造・発表機会の創出・それに関わる人材育成を継続して行いながら、島根県内の様々な場所で情報共有し高めあえるネットワークを形成し、障害のある人たちが安心して文化芸術が楽しめる場所、機会を増やしていく。

●事業を始めたきっかけと、事業開始までの経緯

島根県民会館はもともと障害者を含む多様な方が利用する施設であり、スタッフには多様な困りごとに対応してきた経験があった。その中で、平成22年に全国ろうあ大会を前に行った障害当事者との館内モニターツアーをきっかけにバリアフリーへの意識が高まり、まずは当事者の意見を参考に、点字ブロックの塗り替えなどの環境整備を実施。そこで障害当事者との関係がつくられた。平成27年には、市民団体からの希望を受け、インクルーシブ教育を行う公立小学校を舞台とした映画『みんなの学校』の上映会を共催、音声ガイドや、監督のトークの要約筆記の導入を試みた。

障害者差別解消法が施行された平成28年には、インクルーシブ事業について学ぶ「バリアフリーイベント講座」を実施。10人近い視覚障害者が参加し、その方々を中心に一緒に何かしようという機運が高まった。講師で音声ガイド解説者の田中京子氏、視覚障害者情報提供施設ライトハウスライブラリーの庄司健氏ら、地域の支援者とのネットワークも構築。この講座は、高齢化が顕著な地域性

も念頭におき、身体が不自由になっていく高齢者が今後も来場できる公共ホールになるための知見を得たい、という側面からも企画された。

そのような中で、当事者の希望も受け、平成 28 年、29 年に田畑真希氏を講師として「視覚障害者を含むダンスワークショップ」を実施（一般財団法人地域創造「公共ホール現代ダンス活性化事業」を活用）。翌年に行った田畑真希ダンス公演には、ワークショップ参加者から視覚障害のある市民ダンサー 2 人が出演した。このとき、仲間が出る公演を鑑賞したいという当事者の要望を受け、音声ガイドの導入および公演前のタッチツアーを実施。市内の小学校へのアウトリーチも行った。そして平成 30 年度にはダンスワークショップに加えて、音声ガイドの育成に取り組む「舞台芸術における音声ガイド解説者ワークショップ」を開催。同年のダンス公演には視覚障害がある 3 名を含む市民ダンサー 13 名が参加、学校へのアウトリーチも継続的に実施した。

●インクルーシブシアター・プロジェクト事業の変遷

地域創造の助成期間終了後も、事業を継続する必要性を感じていたため、「インクルーシブシアター・プロジェクト」と銘打ち、広く文化振興を行う中でインクルーシブな事業にも取り組むという、館の姿勢を明確に打ち出すことにした。当初は島根県民会館単体のプロジェクトで、まずは前年度までの創作・鑑賞・人材育成を継続して行った。令和 2 年度はコロナ禍で継続できず、地元のカメラマンを起用して田畑氏のダンスの映像作品を制作・配信し、その後映像とダンスのコラボ上演を行った。

県の西部にある島根県芸術文化センター グラントワでは、この間、活動を通じて地域の情報を収集しながら地域に必要な事業を検討し、令和 3 年から同プロジェクトとして「ダイバーシティいわみ」を始動させた。リサーチの結果に基づいて行った事業の一つに、ろう学校へのアウトリーチがある。また、「まちと福祉と芸術文化」について、地域の福祉・芸術家・まちづくり・教育関係者、ホールスタッフなどが分野を超えたネットワークを作るオープンミーティングや、「にぎやかな日々」というバリアフリー公演事業を継続開催している。



ワークショップの様子



公演「ランウェイ」

●人材育成の取組

専門人材や予算が不足している状況から、これまでは鑑賞サポートを付ける機会は限られていたが、人材を地元で育成すれば、障害のある人の鑑賞機会も増やすことができ、県外から人材を呼ぶより旅

費の分だけ低コストでサポートを付けられるようになるだろう。令和元年度に「舞台芸術における音声ガイド解説者ワークショップ」を始め、音声ガイド解説者の田中京子氏を講師に迎えて人材育成にも取り組み始めたのは、そのような考えからである。その後のダンス公演で受講者が実際に音声ガイド解説をするなど、人材が育ちつつある。何か実行すると足りないところが見えてくることから、そこを補う事業を行う必要性を感じ、結果として鑑賞・創造・人材育成の3事業を同時並行で進めている。



オープンミーティング

グラントワの行うオープンミーティングについては、ミーティングの場で考えたことや話し合われたことを、その後の「にぎやかな日々」公演に反映させて公演をブラッシュアップし、また次のオープンミーティングで話し合う、という循環ができています。ミーティングの初回には実演家、教育、福祉、伝統芸能、まちづくり関係者など、7市町20名が参加、近年は30～40名が参加している。公共ホールが地域に根ざした人材がつながる場をつくるために機能すること、地域のハブとなることを意識している。このような活動の結果、現在は、文化施設に距離があるなど、文化芸術にアクセスしにくい層に鑑賞・参加機会を届ける「にぎやかな日々」に携わる地元実演家たちが各地で自発的にバリアフリー音楽会を行う状況ができてきている。

●事業を行う上での工夫

- ・ライトハウスライブラリーの庄司氏からの助言もあり、当事者抜きに当事者のことを決めないよう意識している。
- ・視覚障害者がワークショップ会場やステージ上の自身の位置を捉えやすくするよう、スピーカーの位置を固定する、足元に危険なものがある場所には素材を変えたものを置くなど、当事者に聞きながら、参加しやすくなる工夫を行っている。
- ・参加者と講師の田畑氏を交えての振り返りの場を多くもち、対話を重ねながらお互いの緊張もほぐし、関係性を築いていった。
- ・劇場だけで企画するのではなく、既に地元にいる福祉の専門家や音楽療法士などの人材やノウハウと繋がり、「劇場の力」と「地域の力」の総和を図っている。

●研修

全体研修として実際に視覚障害者をアテンドする研修を行うほか、県が行うサポート研修（障害の基礎的なことを学ぶ研修）にも参加している。また、手話講習や、障害者差別解消法、合理的配慮についてなど、タイムリーなテーマに沿った研修も実施している。テーマや講師については、現場の希望も聞きながら決めている。

●事業担当者・施設・関係者の変化

- ・事業を開始した当初は、必ずしも職員全員に理解があったわけではなかったが、事業を継続するうちに、劇場職員それぞれがどうサポートすればよいのかなどの気づきを得て、手引きや声がけなど適切にできるようになっている。公演やワークショップでは舞台技術職員も講師や当事者の意見を聞き、制作担当とやり取りをしながら積極的に工夫し、新しい挑戦ができています。
- ・ダンサーの田畑氏は、視覚障害の人と一緒にダンスをするのは当館の事業が初めてとのことだった。

「自由な身体表現が主になる」ということを当事者に伝えると消極的な意見もあったが、試しに関係者ワークショップをしたところとても盛り上がった。その後は信頼し合える関係を築くことができ、互いに試行錯誤しながら進めてきている。公演ではそれぞれの身体の特長やサポートを演出の一部にするなど芸術的な演出に昇華する田畑氏への評価が高い。田畑氏からは、ダンサーとして当事者のダンスから刺激を受けているとのこと。また、市民ダンサーから発展したダンスチーム「ビヨン・ド・タバニー」では、見える見えないに関わらずお互いに刺激し合える関係ができており、それぞれにとって必要な場所となっている。

・視覚障害のある方の中には、ダンスをする際に床を触るなど体を低くして自分の位置を確認しながらダンスする人もいますが、安全を確保しながら行うワークショップ等を重ねるにつれ身体が解放され、伸びやかになっていったように感じている。また、以前社交ダンスをやっていた、ピアノを長年弾いているなど、ダンスから個人のストーリーも浮かび上がってきた。

●事業の課題

・事業目的には多くの内容を詰め込んでいるが、全てを実施できているわけではない。特に地域には人材が不足しており、支援人材をどう掘り起こしていくかに課題がある。

・県域が広く公共交通機関も少ないため、情報は届けられても、実際に参加・鑑賞できる障害者・子ども・高齢者は限られている。芸術文化にアクセスしづらい層がいる現状を、公共ホール単体ではなく地域全体の課題と捉え、分野を超えて地元団体や活動者との連携を深め、住民への理解促進と地域循環に繋がる取り組みと位置付けて展開する必要があると考え、グラントワではその方向で動いている。

・アクセスしにくい層に向けた活動を、地元実演家たちも自発的に始めてくれているが、やはり資金面に課題がある。他の自治体からの助成も受けたいが、難しい面がある。

●今後の展開

人材育成については、関心を持ってくれる人を見つけ、少しずつ専門的知識のある人材として育成し、県内や他地域からの相談にも応えられるようにしていきたい。その未来に向け、他施設にも働きかけ、よい関係を築いていきたい。特に音声ガイドの場合、他地域との連携を図り、互いの公演を支援するような形に発展していくことを期待している。今後はコーディネーターや字幕制作者の育成も考えていきたい。ダンスのワークショップについては、対象とする障害の種別を広げていきたい。

鑑賞事業の対象の門戸を広げることを始め、公共施設としての機能をさらに広げていきたいが、そのためには地域の人々がどこまで受容できるかが重要だ。たとえば、不随意に声が出てしまう人も有料公演と一緒に鑑賞するには、その場に受容的な空気が必要であり、そのための仕組みをつくり、地域の受容性の高まりと、新たな鑑賞の在り方を提案していくことも、公共ホールの役割であると考えている。多様な関係者、専門家と連携しながら時間をかけて取り組んでいきたい。

●主な事業

年度	事業名	事業内容・鑑賞サポート内容・参加者等
平成 28 年度～	視覚障害者を含むダンスワークショップ ＊以降、毎年ダンスワークショップを実施	講師に田畑真希氏を迎え、視覚障害者を含むダンスワークショップ。
平成 29 年度～	田畑真希ダンス公演「色の話、余白の色」 ＊以降、毎年、鑑賞サポートを付けた田畑真希氏のダンス公演、アウトリーチを実施	視覚に障害のある市民ダンサーを含めたダンス公演。音声ガイドを初めて実施。その後は音声ガイド解説者講座の受講生等も音声ガイドに参加。
令和元年度～	音声ガイド解説者ワークショップ/養成講座 等 令和 2 年まで音声ガイド解説者の育成を目指した講座等を実施	田中京子氏を講師に、座学＋ダンス公演のリハーサルに参加し、実際の公演で行うために実践的に学ぶ。
同	鑑賞支援コーディネーター育成講座 知的・発達障がい編（共催）	主催：文化庁、社会福祉法人大阪障害者自立支援協会（国際障害者交流センター ビッグ・アイ）
同	知的・発達障がい児（者）にむけての劇場体験プログラム「劇場って楽しい!!2019 in しまね」 風と森の音コンサート ＊令和 2 年、映画上演に内容を変え実施	知的・発達障害児（者）に向けたプログラムを実施。実施にあたり、鑑賞支援コーディネーター育成講座（知的・発達障害編）も実施（共催）。
令和元年度～5 年度	島根県立浜田ろう学校 和太鼓アウトリーチ	年間 2 ～ 4 回程度開催、講師は地元のプロ和太鼓ユニット「今福座」。
令和 2 年度～	文化庁委託事業 「障害者による文化芸術活動推進事業」初採択	
令和 2 年度（～3 年度）	ダンス映像作品短編集「或る椅子の、つぶやき」 ＊令和 3 年度 島根県民会館で舞台上演	コロナ禍のため、公演に変わり、松江市内各地（県民会館、公園、古墳など）で収録。音声ガイド付き。
同	ダンス公演「SHOKI ー鍾馗ー」藤田善宏 × 益田市石見神楽神和会の本番映像バリアフリー化	伝統芸能「石見神楽」とコンテンポラリーダンスのコラボレーション舞台の映像化（「THEATRE for ALL」/バリアフリー字幕（原語・古語・現代語・英語））。地元で字幕作成が可能となるようなノウハウの取得をめざした。
令和 2 年度～	Meetup! 石見～「まちと福祉と芸術文化」についてのオープンミーティング #01 ＊以降、会場や内容を変えながら定期的に開催	福祉、教育、芸術、街づくり、伝統芸能分野の方などで障害者の芸術活動に関心のある方を対象にネットワークと実践の場づくりをめざす。ユニバーサル鑑賞のトークセッションやワークショップも実施。県西部ローカルな事業として始め、令和 6 年 6 月度は全県に向けて開催した。
令和 3 年度～	「にぎやかな日々」 ＊以降、毎年、会場や内容を変えながら実施	初年度は江津市、益田市で開催。松江会場では石見神楽・プラスバンドの演奏、ミニマルシェ等を実施。江津会場では音楽療法士と地元演奏団体による音楽体験と地元演奏家 4 組によるにぎやかな音楽会を実施。手話通訳、字幕、映像、要約筆記を導入。 また、ホールに来場しづらい山間地エリアにて廃校を活用した館外での事業「にぎやかな学校」（県西部吉賀町）などにも取り組んでいる。
令和 3 年度	グラントワ × Shimane Cinema Onozawa 事業 映画「ウェディング・ハイ」ユニバーサル上映 & 大久明子監督トークセッション	聴覚障害当事者からの「最新映画を映画館で皆と楽しみたい」という声から地元映画館と連携して開催。第一回オープンミーティングで立ち上がった地域団体 atelier103 によるユニバーサル鑑賞入門ガイドを配布。

令和5年度	劇団山の手事情社アウトリーチ@島根県立隠岐養護学校	養護学校でのアウトリーチ。中等部、高等部の生徒が参加。
令和6年度	障害者福祉施設におけるダンス・音楽インリーチ	四ツ葉園 体育館、島根県民会館を会場にワークショップを実施。これまでにダンス事業に参加してきた市民ダンサーの3名がアシスタントとして参加。
令和6年度	刃田綴色（東京事变）アウトリーチ@島根県立益田養護学校	養護学校での音楽アウトリーチ。小学部・中学部・高等部が参加・共演する年度内4回の継続型事業として実施。
同	「まちと福祉と芸術文化」についてのオープンミーティング	年度前半に全県を対象にしたミーティングの開催、後半には県西部を対象としたローカル版のオープンミーティングを開催。

【「島根インクルーシブシアター・プロジェクト」事業データ】

開始：令和元年度

補助金等：文化庁 障害者等による文化芸術活動推進事業

障害当事者・関係団体との連携：島根県視覚障害者福祉協会、松江市視覚障害者協会、山陰網膜色素変性症協会、音声ガイド解説者・田中京子氏（Reading ACT）、ライトハウスライブラリー・庄司健氏、国際障害者交流センター ビッグ・アイ、島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートベース しまねいろ、島根県聴覚障害者情報センター、島根県立大学、Atlier Sunoiro、Shimane Cinema Onozawa など

【実施者基本情報】

●島根県民会館

所在地：〒690-0887 島根県松江市殿町 158 TEL：0852-22-5506

設置者：島根県 **開館：**1968年9月

管理者：公益財団法人しまね文化振興財団

規模：大ホール（1,537席）、中ホール（576席）、楽屋、リハーサル室 ほか

施設の特徴：文化芸術を県民に直接提供する「文化事業」を、「鑑賞事業」「育成事業」「創造事業」の3本柱で実施。文化芸術団体を支援する「文化芸術活動支援事業」も展開。

ホームページ：<https://www.cul-shimane.jp/hall/>



●島根県芸術文化センター グラントワ

所在地：〒698-0022 島根県益田市有明町 5-15 TEL：0856-31-1860

設置者：島根県 **開館：**2005年10月

管理者：公益財団法人しまね文化振興財団

規模：大ホール（1,500席）、小ホール（400席）

施設の特徴：「島根県立石見美術館」と「島根県立いわみ芸術劇場」の複合施設。多様で質の高い芸術文化の鑑賞機会を提供するとともに、地域とともに新しい芸術文化を育み、その創造をめざす。

ホームページ：<https://www.grandtoit.jp>



写真提供 公益財団法人しまね文化振興財団